

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月30日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520765

研究課題名（和文） 山陰における前方後円墳の出現過程

 研究課題名（英文） On the process of acceptance of *Zenpokoefun*(Keyhole-shaped tumuli) in *San-in* District, Japan

研究代表者

高田 健一（TAKATA KEN-ICHI）

鳥取大学 地域学部 准教授

研究者番号：70403368

研究成果の概要（和文）：山陰における前方後円（方）墳の出現過程を追究する上で重要と考えられる鳥取県南部町・普段寺1号墳の発掘調査を行なうとともに、既存の出土遺物の再整理を行なった。発掘調査の結果、古墳時代前期前半の前方後方墳であると結論づけた。また、かく乱によって埋葬施設は完全に破壊されていたが、墳丘構造など築造技術に関わる情報を得た。

普段寺1号墳以外にも、これまで出土遺物が知られていながら十分に資料化がはかられていなかった前期古墳の出土資料について、遺物の観察と再整理を行なった。

研究成果の概要（英文）：The results of archaeological investigations at *Fudanji* tumulus have made considerable contribution to research into the process of acceptance of *Zenpokoefun* (keyhole-shaped tumuli) in *San-in*. Our 6-years investigation reveals that the *Fudanji* tumulus is one of the earliest *Zenpokohofun*, keyhole-shaped tumuli with a quadrangular rear portion, in *San-in*. Because of destructive robbing, the burial itself and funerary objects were totally lost. But, the construction skill of burial mound was well observed. Other than that above, I observed and recorded funerary objects from several early *Kofun*-period tumuli in *Tottori* pref.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：日本考古学

## 1. 研究開始当初の背景

近畿地方中枢部における前方後円墳の築

造動向と地方のそれが連動していることは、古墳時代政治史を読み解く重要な手がかり

と認識されてきた。そのような認識の基礎は精緻な古墳編年にあるが、その編年研究が進む原動力は、新資料の追加だけでなく、既存資料の再整理・再評価等によって理解が深まることにある。

山陰地方では、弥生時代以来の伝統を引く方形墳がつくられる段階を経た後、4世紀後半から前方後円墳が導入され始めると考えられているが、基礎的な調査資料が不足しているため、他地域との比較を踏まえた編年軸に正しく位置づけることができない。山陰地方のように強固な伝統を維持し、特異性を見せる地域が、いつ、どのように前方後円墳を築くのか、を解明することは、古代国家成立史を追究する上でも必要な課題である。

また、基礎的な資料の情報共有ができていないことが地域における古墳に関する認識の深化を妨げている。この状況を打開するためにも、既存資料の再整理・再評価を行なうことが必要である。

## 2. 研究の目的

上記のような課題を解決するためには、既存資料の再調査と再検討を通じて、古墳の位置づけを確かなものとする必要がある。まず、山陰地方において初期の前方後円(方)墳と目されつつも、基礎的な情報が整理されていないために研究の支障となっている資料群の再評価を試みる。

とりわけ、数10年以上前に出土遺物が知られているが、それらがまとまって報告されていないため、古墳の性格や年代観の検討に支障があるものについて、発掘調査や遺物の再整理作業を行なって、各古墳の年代的な位置づけを明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 2006年以降、すでに調査を継続してき

た鳥取県南部町・普段寺1号墳の発掘調査を行なうとともに(第8次、第9次調査)、既存出土遺物の再整理作業を行なった。発掘調査は、墳丘形態を確認するトレンチ調査とともに、後方部の埋葬施設を確認する目的の調査区を設けて実施した。

また、既存の出土遺物は、佐々木謙コレクションとして米子市に寄贈された遺物を対象とし、発掘調査資料との接合関係を確認しつつ、再実測作業を行なった。

なお、これらの調査は、島根大学考古学研究室と合同調査団(普段寺古墳群調査団)を組織して実施してきたものである。

(2) 上記の作業に平行して、鳥取県の前期古墳のうち、古くに調査されて出土品が知られていながら十分に資料化がはかられていない資料群について、資料調査と再評価を行なった。鳥取県立博物館、東京国立博物館、京都大学考古学研究室など複数の所蔵機関にわたって保管されているものを中心に、資料観察を行なうとともに、一部は再実測を行なった。

## 4. 研究成果

(1) 普段寺1号墳について、現地の発掘調査と既存の出土遺物の再整理を行なった結果、古墳時代前期前半の新段階に位置づけうる前方後方墳であることを明らかにした。米子平野を中心とする伯耆地域では、古墳時代初頭に出現する方墳(日原6号墳)に後続するが、出雲地域では神原神社古墳や大成古墳など、大規模な方墳が築造される段階に平行すると考えられる。前方部が取り付く墳丘形態の初現と位置づけた。

また、発掘調査の結果、地山水平面を削出した後に比較的厚い盛土を行なう墳丘構築法が特徴的であった。山陰における類例と比較したところ、古墳時代前期前半以前の地域

的な伝統にはない墳丘築造技術であることを明らかにした。墳丘構築法について、外来の技術系譜の影響を考えた。

さらに、既存の出土遺物が正しく普段寺1号墳から出土したものであることを改めて確認するとともに、その概要を明らかにした。ただし、出土品の整理作業はすべて完了しておらず、すべてを報告するに至らなかった。また、類例が限られる特殊な土器の位置づけは今後の課題であり、木製品などとの比較検討、北陸や東海地方の土器との対比などが必要となる。

(2) 普段寺1号墳以外に、これまで出土遺物が知られていながら十分に資料化がはかられていなかった前期古墳について、遺物の観察を行なうとともに、一部は再整理・再実測を行なった。

対象とした主な古墳は、鳥取市古郡家1号墳、六部山3号墳、湯梨浜町馬ノ山4号墳、倉吉市上神大将塚古墳、大山町徳楽方墳である。これらの出土遺物の再実測作業を目指し、おおむね所期の目的を達成したが、資料数が膨大なため、資料化が果たせなかったものも残っている。

また、古郡家1号墳、六部山3号墳については、新鳥取県史編さん事業の調査として、本補助金交付以前から取り組んできたものである。資料整理そのものについては本研究経費の対象外としたが、その成果や知見は本研究にも反映させた。また本研究の知見は、新鳥取県史編さん事業にも活用していく予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計1件)

①高田健一2012「鳥取県西伯郡南部町・普段寺1号墳の調査」考古学研究会岡山例会(2012年1月7日、岡山県立図書館)

[図書] (計4件)

①高田健一・東方仁史 2013『鳥取市古郡家1号墳・六部山3号墳の研究—出土品再整理報告書—』鳥取県、135p.

②高田健一2013『山陰における前方後円墳の出現過程』鳥取大学地域学部、58p.

③高田健一・岩本崇編 2012『普段寺古墳群IV—第9次調査概要報告書—』普段寺古墳群調査団、12p.

④高田健一・岩本崇編 2011『普段寺古墳群III—第8次調査概要報告書—』普段寺古墳群調査団、20p.

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高田 健一 (TAKATA KEN-ICHI)

鳥取大学 地域学部 准教授

研究者番号：70403368

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：